

『存在と時間』の彼方へーデリダ『ハイデガー』講義の視点から

大江倫子（首都大学東京）

2013年に刊行されたデリダの1960年代の『存在と時間』の講義原稿『ハイデガー—存在の問いと歴史』（略称『ハイデガー』講義）は、デリダの多くの著作に示唆されているハイデガーとの強い絆を解明するための重要な手掛かりであるだけでなく、当時のフランスにおけるハイデガーへの関心の射程の深みを証言している。それというのもフランスでは、1938年に『形而上学とは何か』が仏訳されて以来中後期の著作の仏訳が次々に刊行され、フッサール現象学とともに伝統的形而上学の超克として、サルトルをはじめとする最先端の哲学者たちを大いに触発してきたからである。そこで希求されていたのは、マルクス、ニーチェ、フロイトの批判を超克し、過去の哲学テキストからそれぞれの新たな意味を汲み取りつつ、特定の生物学的区別や文化や社会に限定されず、あらゆる存在者についてその本質を与え返す20世紀の存在論である。19世紀以降哲学を超克したかのように優勢となった実証主義には規制されない別の真理の領野、無にも等しいとはいえ決して無ではない根源的な真理の領野を確保する存在論である。本稿ではこうした視座にあるデリダの講義原稿の読解から、デリダがハイデガー哲学全体に見出したその革新性と限界、途絶された『存在と時間』との整合性と乖離を分析し、その後デリダ自身が引き受ける哲学の課題とともにその意味を思考する。

第1章では、『存在と時間』にデリダが読解したその課題、とりわけ第6節の存在論の歴史の解体の課題、第7節のロゴスの概念、第72節の生起の概念を、デリダが自らの課題として引き受け、形而上学の脱構築、ロゴス中心主義批判、現前の形而上学批判として練りあげたことを示す。この批判的作業は、ハイデガーが言明した「伝統が生み出した閉塞状態の解消」、「存在の最初の諸規定が得られた根源的諸経験へ引き戻す解体」(SZ,22)を継承し、1970年代まで一貫してデリダの主要な課題であった。

第2章では、デリダがハイデガー自身の後年のテキストを参照し、その視点から初めて歴史性の問いが立てられるべきことを主張し、『存在と時間』における現存在の歴史性としての歴史性一般の規定の限界を指摘することを示す。ここで根本的な論点は、「世界像の時代」における存在論的世界表象の視点、「ヒューマニズム書簡」における脱存と存在の真理の強調である。デリダはこうした視点から決意性、死へ臨む存在の概念を規定しなおしている。さらに結論部での重要な批判として、ハイデガー哲学全体を通じて、存在の問いと歴史は隠喩的に記述されたことが指摘される。

第3章では、ハイデガー哲学のこうした難点をその後のデリダが超克しようとした様相の一端を示す。第一にデリダは隠喩ではなく構造による存在の記述を試みたこと、第二に存在そのものではなく実在や架空の多様な人間像の記述を通じて、現存在の根源的倫理を

記述しようとしたことである。ここで存在論的差異が解釈の多様性と構造の一義性として
接続されることで、脱形而上学としてのハイデガー哲学の企図は、根源的多様性を可能に
する存在論的倫理として、より現代的な光のもとに継承されることになる。